

## 51 田原養伯の往診用薬箱について

中村輝子・遠藤次郎<sup>1)</sup>W<sup>2)</sup>・ミヒエル・奥村<sup>3)</sup> 武<sup>1)</sup> 東京理科大学薬学部<sup>2)</sup> 九州大学大学院<sup>3)</sup> 奥村内科医院

科研費特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査研究」の一環として江戸・明治時代初期の携帯用薬箱の調査を行ってきた。今回は福岡市奥村家蔵「田原養伯の往診用薬箱」について報告したい。

この薬箱では、黒の漆塗りの六段の重箱を桑の外箱（横三五七、奥行二〇四、高さ三〇〇ミリメートル）が覆っている。重箱の上蓋には、次のような言葉が刻まれている。「寧為庸相勿為庸醫稅政易見拙技難知惟毒惟良惟汝所使器而用之道同君子為田伯敬廣建」。これを読み下すと「寧ろ庸相と為るも、庸医と

為る勿れ。稅政は見われ易きも、拙技は知り難し。惟れ毒、惟れ良は、惟に汝の使う所の器のみに而て、之を用る道は、君子と同じ。田伯敬が為に。廣建」となる。「凡庸な宰相にはなっても、藪医者になつてはならない。悪い政治は人に知られやすいが、拙い技術は人にわかりにくい（からである）。一般的に毒とか、薬とかあつても、それらは単なる道具であり（これを使いこなせるか否かが問題であり）、（良医の）使い方は、君子（の施政）と同じである」ととれる。

ここに見られる「田伯」は筑前上須恵の眼科医、田原養伯であり、また、養伯あての為書を記した「廣建」は、豊後日田の私塾「咸宜園」で進歩的な教育をしたことで知られる、江戸後期の儒者・漢詩人、廣瀬建（一七八一―一八五六年、号は淡窓）である。廣瀬淡窓が「建」と名乗つたのは、四八歳以降であることから、この文は一八二七年以降に書かれたことになる。廣瀬淡窓の文化六年（一八〇九）の日記に「五月、予、既に須恵に至り…。田原氏を訪うて診察を受けたり。…田原氏大医にして、四方より来り留まって治を乞う者

多し。…予、須恵に留まること三十日。…」(石瀧豊美、『広報すえ』一八三号、一九八二年)とあり、淡窓は二八歳のときに田原氏の治療を受けたことがわかる。両者のこのような交流の中で、この薬箱の為書が贈られたとみられる。年代から推測すれば、文化六年に淡窓を治療した医師は田原家六代目の田原養柏(文政二年没)、為書を贈られた養伯は九代目の田原養柏(嘉永二年没)と推定される。

薬箱の最上段には三九袋、二段目には一九袋(本来は二四袋?)、三段目には一六袋、四段目には一五袋(本来は一六袋?)の薬袋が収められていた。また、薬袋の大きさは一段目のものが最も小さく、薬を入れる部分の大きさは二〇×五〇×二〇ミリメートル、二段目のものは二〇×八〇×二〇ミリメートル、三、四段目のものが最も大きく、三五×八〇×二〇ミリメートルであった。五段目と六段目は空で、何が入っていたかは不明であるが、薬袋を仕切る板がないことから、薬袋は収納されていなかったとみられる。

薬袋には段を示す文字は記されず、薬物名が二字で

記され、一段目の三袋が丸剤名であった以外は、全て生薬名であった。生薬のうち、『傷寒論』・『金匱要略』に収載された生薬は、最上段では一六種類(四四%)、二段目では九種類(四七%)、三段目では十種類(六三%)、四段目では十種類(六七%)であった。三、四段目の薬袋の大きさが最も大きいことを考慮すれば、この段の薬物が最も使用頻度が高かったと思われる、一方、小さな薬袋に入っている最上段のものは使用頻度が低かったと見られる。これらのことから、この薬箱を用いた医師は、『傷寒論』・『金匱要略』の処方に基づけば使いながらも、それ以外の処方も用いていたと推定される。なお、製剤ならびに生薬の面では、眼科医の薬箱を特徴付ける点は見出せなかった。

薬箱の形式としては重箱式は引き出し式よりも古いと見られるが、薬袋に段を示す文字が記されていない点、ならびに薬物名が一字薬名でなく二字で記されている点などは比較的新しい点であり、江戸時代後期の特徴を備えている。